

# 行為過程を修飾する副詞句

大石 強

## 1. はじめに

本稿では、Cinque(1999)で状況を表す副詞句 (circumstantial adverbials : 以下、状況副詞句と呼ぶ) と呼ばれ、副詞句の階層関係で最下層に属し、お互いに厳密に順序づけられていない副詞句の特徴を明らかにする。Cinque は、この副詞句が基底の事象構造について叙述する修飾語として機能すると述べているが、厳密に言うと、事象の中の行為過程を修飾するものと考えられる。それは、この副詞類が、受動構文の義務的付加詞として現れる副詞類や中間動詞構文に現れる副詞類と共通のメンバーを有しており、義務的付加詞の副詞類や中間動詞構文に現れる副詞類は、その意味的機能から、行為過程を修飾していると考えられるからである。

以下、第2節で、Cinque(1999)の状況副詞句の特徴を概観し、その特徴が出てくる理由を検討する。第3節では、Grimshaw and Vikner(1993)の義務的付加詞 (obligatory adjuncts) を概観し、状況副詞句と比較検討する。第4節では、中間動詞構文 (middle constructions) を検討し、そこに現れる副詞句が行為過程を修飾する副詞句であることを論じ、義務的付加詞や状況副詞句と比較検討する。第5節でまとめをする。

## 2. Cinque(1999)の状況副詞句

本節では、Cinque(1999:28)で述べられている状況副詞句の特徴を概観し、その特徴がこの種の副詞句のどの機能から生じてくるのかを考察する。

状況副詞句には、場所 (place)、時間 (time)、様態 (manner)、手段 (means)、

共同者 (company)、理由 (reason)、目的 (purpose) 等を表す副詞句が含まれ<sup>1</sup>、Cinque が記述している特徴をまとめると次の通りになる。

(1) 状況副詞句の特徴

- a. 動詞句の中で動詞の補部の後に現れる。
- b. お互いに厳密に順序づけられていない。
- c. お互いの構造位置により、互いの作用域の中に入れる。
- d. (一部の様態の副詞を除き)典型的には、前置詞句 (for three hours, in the kitchen, with great zeal, for your love, in a rude manner, with a bicycle, etc.) か裸名詞句 (bare NP) 形 (the day after, tomorrow, this way, here, etc.) で現れる。
- e. 話題類の位置である文頭の場面設定副詞 (adverbs of setting) の位置を除いて、副詞句に認められる動詞句より前の位置に生ずることが出来ない。
- f. 他の副詞句が命題から命題への写像を行う演算子として機能するのに対して、基底の事象構造について叙述する修飾語として機能する。

状況副詞句が動詞句内に複数現れた場合、お互い厳密に順序づけられていないことを示す例に次のようなものがある。

- (2) a. He attended classes every day of the week in a different university.
- b. He attended classes in each university on a different day of the week.

(Cinque(1999:28))

- (3) a. He attended classes in each university with a different friend.
- b. He attended classes with each friend in a different university.

(Cinque(1999:28))

- (4) a. John read the letter yesterday in the garden.  
 b. John read the letter in the garden yesterday.
- (5) a. John cleaned the kitchen for two hours with his friend.  
 b. John cleaned the kitchen with his friend for two hours.
- (6) a. Mary wrote the letter in the morning in her room.  
 b. Mary wrote the letter in her room in the morning.

Cinque は、状況副詞句に現れる副詞以外の副詞がそれぞれの副詞にふさわしい機能範疇の指定部に生成されると考えている。この指定部の順序は、Cinque が調べた約80の言語で共通で普遍的なものであると主張している。これに対して、状況副詞句(あるいは前置詞句)は副詞(前置詞)が主要部となっている最大投射として動詞句内に現れると考えている。従って、機能範疇の指定部に現れる副詞句は、機能範疇の構造上の位置が普遍的に決まっており、当然厳密に階層的に位置づけられることになるのに対し、状況副詞句については、自由に動詞句内に生じると考えている。

機能範疇の指定部に現れる副詞句は、その本質的意味機能により必然的に階層的関係の中に位置づけられると考えられる。例えば、probably がこれから行う発言内容の蓋然性について表現するという意味機能をもつとき、必然的に文全体に先行することになる。また、出来事の頻度を表す副詞は事象構造に対応する構造単位である vP に先行するなどの意味機能的に結びつけられた本来位置をもつ。このような機能的に本来の位置をもつ副詞句は、必然的にお互いの構造上の階層関係を有し、以下の例が示すように、表面上厳密な順序関係を保持することになる。

- (7) a. John often has a drink before he goes to bed.  
 b. Probably John has a drink before he goes to bed.

- (8) a. Probably John often has a drink before he goes to bed.  
 b. \*Often John probably has a drink before he goes to bed.

それでは、状況副詞句は、なぜ厳密に順序づけられない(あるいは、階層的に位置づけられない)のであろうか。それは、お互いが他を自分の作用域に含まなければならない本質的な意味機能をもっていないからであると考えられる。例えば、時間場面を設定する「いつ」が、場所場面を設定する「どこで」より上位に位置づけられなければならない必然性は何もないと考えられる。従って、状況副詞句は、事象構造に対して、いわば並列的に対等に結びついていると考えられるのである。この性質により、構造上の階層に厳密に配置されることがないのである。

ただし、状況副詞句でも構造上に配置されると、構造の特質により必然的に階層関係が生ずる。このことは、(2a)では、every day of the week(時間表現)が a different university(場所表現)に対してより広い作用域をもち、(2b)では、each university(場所表現)が a different day of the week(時間表現)に対してより広い作用域をもつことから分かる。同様に、(3a)では、each university(場所表現)が a different friend(共同者表現)に対してより広い作用域をもち、(3b)では、each friend(共同者表現)が a different university(場所表現)に対してより広い作用域をもつ。しかしながら、この階層関係はあくまでも構造上に位置づけられた結果生じるものであり、本質的な意味機能によるものではないと考えられる。状況副詞句が構造上の厳密な位置をもたないという性質にかかわらず、言語要素として構造上のどこかに現れなければならないために生ずる効果と言うべきである。

### 3. 受動態の義務的付加詞

前節で、Cinque の状況副詞句について述べたが、本節では、同様のメンバーからなる種類の副詞的修飾要素について述べることにする。それは、

Grimshaw and Vikner(1993)で論じられている、受動態に現れる義務的付加詞である。以下、Grimshaw and Viknerの議論を概観することにする。

一般に、項はそれを選択する述語により義務的にも随意的にもなるが、付加詞は常に随意的であると一般に考えられている。しかし、Grimshaw and Viknerは、これが正しくないと主張する。一定の受動述語においては、通例随意的であるby句が義務的であると思われるからである。

- (9) a. \*This house was built/designed/constructed  
 b. This house was built/designed/constructed by a French architect  
 c. \*Tomatoes are grown; \*The best tomatoes are grown  
 d. (The best) tomatoes are grown by organic-farmers

しかしながら、(9a)や(9c)の非文法性を救うことができるのは、by句だけではない。時間、様態、目的の付加詞などの他の表現が、by句の代わりに用いられても上記の受動態を容認可能にする。

- (10) a. This house was built yesterday/in ten days/in a bad part of town/only with great difficulty  
 b. (The best) tomatoes are grown in Italy/organically

Grimshaw and Viknerによると、このような義務的付加詞を受動態で必要とする動詞は、建設的(constructive)解釈をもつ達成動詞(accomplishment verbs)であるという。建設的達成動詞とは、状態変化が創造を伴うという意味をもつもの、あるいは、創造に等しい意味をもつものである。あるいは、変化を受けているものが、以前に利用できなかった仕方で利用できるようになっていることを表す動詞である。具体例は、以下の通りである。

- (1) a. draw (a picture), knit (a sweater), dig (a hole)  
 b. make, build, create, construct, erect, manufacture  
 c. cook (a turkey), paint (a house), fix, freeze, broil/fry/saute, develop (a film)

build, grow などでは、出来事の結果、対象物が存在するようになる。cook では、七面鳥を料理をするという出来事が七面鳥を作り出すわけではないが、七面鳥料理を作り出す。これらの動詞はすべて、出来事が生ずる前に主題 (Tneme) が今の形で存在していなかったという意味を共通にもっている。このような性質を持つ動詞を、建設的達成動詞と呼んでいる。

しかしながら、達成動詞全てが受動態で義務的付加詞を必要とするわけではない。達成動詞の中にも受動態で義務的付加詞を必要としないものがあるという。Dowty(1979) が「破壊 (destructive) の動詞」、「パフォーマンスの対象を創造する動詞 (verbs that create a performance object)」と呼ぶものである。この種類の達成動詞は、次の例に示されるように、受動態になっても義務的付加詞を必要としない。

- (2) a. destroy, kill, shoot, ruin, break, arrest  
 b. The boat was destroyed (by the enemy)  
 c. The burglar was arrested/shot (by the police)
- (3) a. The conversation was recorded  
 b. The lecture was transcribed

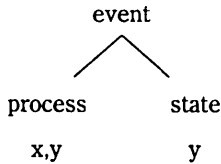
(2)が破壊的達成動詞 (destructive accomplishment verbs) の例であり、(3)がパフォーマンス対象創造動詞の例である。この2種類をまとめて非建設的達成動詞と呼ぶことにする。

建設的達成動詞と非建設的達成動詞はどのように異なるのであろうか。

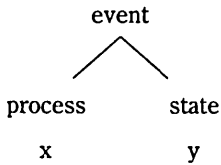
destroyのような破壊的達成動詞は、主題が出来事が生じる前に存在しており、出来事の後で存在しなくなったという意味を持つ。これに対して、建設的達成動詞では、主題は出来事全体が生じるまでは存在しないという意味を持つ。Grimshaw and Viknerは、非建設的達成動詞では、主題が出来事の始めから関わっており、達成動詞の行為過程に参加しているのに対し、建設的達成動詞では、主題が出来事の結果生じるのであり、達成動詞の行為過程には参加していないと論じている。destroyやrecordにとって、行為過程というのは、町を破壊する過程であり、会話を記録する過程である。これに対して、constructやcookにとって行為過程は、建設をすることであり、料理をすることであり、結果状態においてのみ主題が現れる。

Grimshaw and Viknerは、この解釈のもとで事象構造の下位事象同定条件に差が出てくると主張する。下位事象同定条件とは、達成動詞が行為過程と結果状態の2つの下位事象を含んでいることを統語的要素によって同定することにより保証しなければならないというものである。すなわち、達成動詞が達成動詞の意味で用いられていることを形で保証しなければならないという条件である。非建設的達成動詞の主題は、出来事の始めから存在し、行為過程と結果状態の両方と結びついている。従って、主題が統語的に存在することにより、2つの下位事象が同定されていることになるかと述べられている。これに対して、建設的達成動詞の主題は、行為過程を同定していない。というのも、その存在は、結果状態によってのみ叙述されており、行為過程により前提とされていないからであると述べられている。このことは、(14b)で示されている。そこでは、外項が行為過程と結びついて同定し、内項の主題は結果状態のみと結びついて同定している。

- (14) a. x destroys y



- b. x builds y



従って、建設的達成動詞が受動態になったとき、その行為過程を同定するためには、行為過程と結びついた外項 (by 句) で同定するか、行為過程が存在することを意味的に合図する副詞要素(付加詞)が必要となるのである。

行為過程を修飾する副詞的要素が義務的付加詞の役割を果たすことを見てきたが、Grimshaw and Vikner は、行為過程の意味成分を同定するものは、様態 (manner)、時間 (time)、継続 (duration)、場所 (place)、行為過程の目的 (purpose of the process)、行為過程の理由 (reason for the process) を指定する付加詞であると論じている。以下が具体例である。

- (15) a. This example was constructed by two linguists yesterday/in ten minutes/in Geneva/with difficulty/to prove our point/in order to show that we are right/using an IBM/for a good reason
- b. ... and then this example was constructed
- c. When was this example constructed?



しかしながら、付加詞の選択は全く自由というわけではない。事象構造の下位部分の同定が問題となっているのなら、事象と無関係な副詞句は、下位事象性を同定しないので、当該構文を救うのに十分ではない。例えば、probably と fortunately は義務的付加詞として働かない。

- (16) a. \*This example was probably constructed  
 b. \*Fortunately, this example was constructed

(16)の例の過去分詞は、状態の解釈を持つ別の読みを実際持っているが、その場合は constructed は受動態ではなく形容詞である。）

Grimshaw and Vikner が引き合いに出した義務的付加詞の種類は、Cinque が引き合いに出している状況副詞句とかなり重複している。重ならない部分は、Cinque が言及している同伴者と手段を表す副詞的要素が義務的付加詞として言及されていないところである。しかしながら、以下の例が示すように、同伴者(あるいは、同伴物)と手段・道具・材料を表す副詞句は、義務的付加詞として働く。

まず同伴者を表す副詞句であるが、同伴者句が「外項(能動態の主語項)の表すものと一緒に」という意味を表す場合、by 句が受身形に生じていることになり、by 句が義務的付加詞として働き受動態を容認可能にするので、同伴者句自体が義務的付加詞として働いているのか否かが不明になってしまう。従って、「内項(能動態の目的語項)の表すものと一緒に」という意味をもつ同伴物句で確かめることにする。

- (17) a. The house was built with an observatory.  
 b. This house was built with modern amenities.

(17)が示すように、同伴物が義務的付加詞として働き、受動態を救っている。注

意しなければならないのは、同伴物句が主題と並列されていることから、主題と同様に結果状態という下位事象のみを同定していると考えられるかも知れないが、そうではないということである。すなわち、同伴物は、「～と一緒に」という意味を表し、あくまでも行為「～する」を修飾する要素であるということである。同伴物は、行為過程と結びつき「～と一緒に～する」という修飾関係を確立し、同時平行的に行為が行われていることを合図しているのである。すなわち、同伴物が統語的に存在することにより、行為成分が意味として存在することが分かるという下位事象同定を行っていることが重要なのである。

最後に、手段・道具の例を見ておく<sup>2</sup>。

- (18) a. Australia was built by means of hard work and discipline.  
 b. This cabin was constructed by hand.  
 c. The facility was constructed with advanced computer-controlled manufacturing.

(17)、(18)に示されるように、同伴物や手段・道具も義務的付加詞として用いられる。そうすると、状況副詞句と義務的付加詞の集合は、重なり合うことになり、同じ種類の副詞要素であると言えよう。

#### 4. 中間動詞構文に用いられる副詞句

第2節と第3節で、CinqueとGrimshaw and Viknerが別々の言語現象でその特徴を述べた副詞句のクラスが、事象構造の行為過程を修飾する重複する副詞句のクラスであることを見てきた。この行為過程を修飾するという特徴は、中間動詞構文に用いられる副詞句を想起させる。本節では、中間動詞に用いられる副詞句についてのFagan(1992)による特徴付けが妥当であることを論じ、具体例を検証することにより、この副詞句が行為過程を修飾する副詞句の部分集合を成していることを論じる。

Fagan は、中間動詞に用いられる副詞句が、「述語の行為が主語により指定される存在物に関してどのように遂行されるかを記述している“describe[s] how the action of the predicate can be carried out with respect to the entity specified by the subject” (1992:41)」と述べている。すなわち、中間動詞構文は、派生主語(内項の主題)に対して行われる行為過程により主語を特徴づけるという性質を持ち、この行為過程による特徴付けを有意義に指定する副詞句が、いわゆる中間動詞構文に必要な副詞句である。もちろん、副詞句による特徴付けが無くても、行為過程そのものが特徴付けを行うのに十分な場合は、副詞句が必要ない。

- (19) a. This dress buttons.  
 b. This dress won't fasten.  
 c. Glass recycles. (Fagan(1992))

しかしながら、行為過程のみでは不十分で副詞の助けを借りなければならぬときは、行為過程を修飾する副詞句を用いることになる。

Fagan の特徴付けは、妥当であると考えられる。というのは、中間動詞構文に用いられる動詞は、活動動詞 (activity) か達成動詞でなければならない (Fagan 1992:68, Zwart 1997: 3)。この2つの動詞類に共通するのは、行為過程という下位事象を含むことである。これは中間動詞構文が成立するための必要条件である。この2つの動詞類に所属していても、中間動詞構文に現れない動詞がある。一つは、達成動詞でもその行為過程が派生主語の責任として特徴づけられないものは中間動詞構文に現れない。この制限は、buy と sell の違いを説明してくれる。

- (20) a. This book sells well.  
 b. \*This book buys well.

buy も sell も達成動詞であることから、中間動詞構文に現れるはずである。しかし、(20)に見られるように sell は中間動詞構文に現れるが、buy は現れない。Fagan は、この buy と sell の違いは、主語の責任という機能にあるという。「本」は売れ行き (selling rate) に責任があるが、買う割合 (buying rate) には責任がないため、本を「買う」という行為過程で特徴づけるのは不適切ということになる。

もう一つは、達成動詞でも複数補部をとる動詞は中間動詞構文に現れないという Zwart(1997) の制限である。すなわち、中間動詞構文に現れたとき、動詞は補部をもたないということである。このことは、二重目的語構文に基づいて中間動詞構文を作ると必ず非文法的になるということに顕著に表れている。

- ㉑) a. \*This book gives strangers well.  
 b. \*Strangers give this book well. (Zwart(1997))

㉑の対の例文は、このことが動詞の性質とは無関係であることを示している。

- ㉒) a. Bedridden children teach well.  
 b. \*Bedridden children teach math well. (Zwart(1997))

このように見てくると、中間動詞構文に現れる活動動詞と達成動詞という2種類の動詞類のメンバーをさらに限定する2つの上記制限は、行為過程を含まなければならないという条件に影響を与えるものではない。従って、中間動詞構文の本質的な特徴は、Fagan の主張するように、述語の行為が主語により指定される存在物に関してどのように遂行されるかを記述していると考えられる。そうであると、ここで用いられる副詞句は、行為過程を特徴づける副詞句となり、状況副詞句、義務的付加詞と同じ機能を持つことになる。

ここで、具体的に、中間動詞構文に現れる副詞句を検証してみることにする。

Fagan(1992) で挙げられている例から見ていくことにする。

㉓ 様態を表す副詞句

- a. ... with our non-toxic pencil that wipes off easily
- b. Most popular flooring wood ... stains and finishes well.

㉔ 場所を表す副詞句

- a. (Message on return envelope:) Be sure address reads through window.
- b. (Hanging sweater rack:) Secures around closet pole.

㉕ 主語を修飾する副詞句

- a. (From a dog kibble advertisement:) ... cuts like meat, chews like meat.
- b. I think that's silver ... it polishes up like silver.

Fagan は、㉕の副詞句が主語を修飾すると特徴づけている。確かに、主語として現れている物質の属性を他の物質の特性になぞらえて述べているという点では、主語について述べているが、係り結びとしては、その属性が行為過程との関係で比較されているのであり、「～ようにある行為を受けることが出来る」という形で行為を修飾していると考えべきである。従って、Fagan の主語を修飾する副詞句は、様態の副詞句の仲間であると考えられる。

Fagan は、述語を修飾するだけでなく、その表す特性が動作主に起因する動作主指向の様態副詞句が中間動詞構文に生じないと述べている。

- ㉖ a. \*The novel sells proudly.
- b. \*This light plugs in expertly.
- c. \*Polyester cleans carefully.
- d. \*This umbrella folds up skillfully.

同様のことが Klingvall(2003)においても指摘されている。

- (27) a. \*This bread cuts (easily) deliberately.  
 b. \*This bread cuts (easily) by skilled bakers.  
 c. \*This bread cuts (easily) to feed an army.

(27a)では動作主指向の副詞句、(27b)では動作主句、(27c)では目的を表す副詞句がそれぞれ用いられている。Klingvallは、中間構文が動作主指向の副詞や含意された動作主の存在を示す他の句と共起すると適格でなくなるという事実が、動作主が削除されていることを示していると論じている。

この他に、Fagan(1988)の議論から、特定の時点を示す副詞句は中間動詞構文に現れないと考えられる。すなわち、中間動詞構文は、総称的であり、ある時点における特定の出来事を記述しないと論じられている。従って、特定時間を表す副詞句も生じないことになる。これを示す例は次の通りである。

- (28) a. ?Yesterday, the mayor bribed easily, according to the newspaper.  
 b. ?At yesterday's house party, the kitchen wall painted easily.

(28)は、yesterdayが中間動詞の直後に用いられているわけではないが、中間動詞構文に生じないことを示している。

これに対して、時間を表すものでも習慣的な出来事を修飾する時間表現は、中間動詞構文に現れる。中間動詞構文には、Rapoport(1999)やKlingvall(2003)が論じるように、出来事に対する一般化を表す習慣的中间動詞構文(habitual middles)と実際の出来事に基づいていないが過去及び将来の出来事に関わりなく当てはまる可能性中间動詞構文(capacity middles)がある。前者の、習慣的中间動詞構文には、習慣を引き合いに出す副詞句が現れる。

- ㉙ a. This paper reads *daily*. (habitual middle)  
 b. This paper reads *easily*. (capacity middle) (Klingvall, E. (2003))

また、行為の終点までの時間を表す副詞句も現れる。

- ㉚ This book reads in no time. (Klingvall, E. (2003))

最後に、今までの文献で言及されていない副詞句の用例を挙げておくことにする。

㉛ 手段・道具を表す副詞句

- a. We do not bribe by means of external reward. (means)  
 b. Politicians bribe with benefits every year. (instrument)

㉜ 共同物 (company) を表す副詞句

- a. The book sells with 3 juggling balls.  
 b. The book sells with a thousand copies available.

㉝ 理由を表す副詞句

- a. The book sells because of the name of the author.  
 b. A crappy book sells because of a great cover.

以上中間動詞構文に生じる副詞句を見てきたが、状況副詞句とメンバーがかなり重複していることが分かる。重なっていないのは、特定の時点を表す時間副詞句と目的を表す副詞句である。特定の時点を表す副詞句は中間動詞構文の総称性という性質により排除され、目的を表す副詞句は中間動詞構文で動作主が削除されていることから排除されると考えられる。この2種類の副詞句を除けば、状況副詞句と基本的に同じメンバーになり、しかも、その機能は行為過

程を特徴づけて主語の性質を述べている。すなわち、中間動詞構文に生じる副詞句は、行為過程を修飾する副詞句であり、状況副詞句および義務的付加詞と同じ種類の副詞句であることになる。

## 5. おわりに

本稿では、事象構造、とりわけ行為過程を修飾する副詞句を論じてきた。従来別個の現象について論じられてきた状況副詞句、義務的付加詞、および中間動詞構文に生じる副詞句が同じ種類の副詞句であることを見てきた。これらの副詞句の特徴は、意味的クラスが異なる時間、場所などの表現がお互いに厳密な相対的位置をもたないということである。これは、それぞれのクラスの副詞表現が行為過程に対してそれぞれ対等に結びつき、いわば、並列的に並んでいるためと考えられる。

Cinqueにより明らかにされた状況副詞句が機能範疇をもたず、並列的に行為過程を修飾するという共通の特徴を持つのであれば、上記のように色々な現象において共通の働きをするのは当然の帰結であると考えられる。今後は、状況副詞句の一つが関与する現象を見たとき、他の状況副詞句も同じように関与しているのではないかという視点を常にもつ必要があると考える。

## 注

\*本研究は、『英語の文末付加要素に関する実証的・理論的研究(課題番号17520321, 研究代表者:秋孝道)』として、平成17年度～平成18年度科学研究費補助金(基盤研究(C))を受けており、平成19年(2007年)3月の研究成果報告書に「事象構造を修飾する副詞句」として掲載されたものを一部修正したものである。

1. Cinque(1999)は、状況副詞句を全て列挙しているわけではないが、機能範疇に属す副詞句については次の句構造に現れるものと仮定している。従って、この指定された機能範疇をもたない副詞句は、逆に状況副詞句の仲間に入ると考えられる。



The universal hierarchy of clausal functional projections

[*frankly* Moodspeech act] [*fortunately* Moodevaluative] [*allegedly* Moodevidential]  
 [*probably* Modepistemic] [*once* T(Past)] [then T(Future)] [*perhaps* Moodirrealis]  
 [*necessarily* Modnecessity] [*possibly* Modpossibility] [*usually* Asp habitual]  
 [*again* Asp repetitive(I)] [*often* Asp frequentative(I)] [*intentionally* Mod volitional]  
 [*quickly* Asp celerative(I)] [*already* T(Anterior)] [*no longer* Asp terminative] [*still*  
 Asp continuative] [*always* Asp perfect(?)] [*just* Asp retrospective] [*soon* Asp approximative]  
 [*briefly* Asp durative] [*characteristically(?)* Asp generic/progressive] [*almost*  
 Asp prospective] [*completely* Asp Sg Completive(I)] [*tutto* Asp Pl Completive] [*well* Voice]  
 [*fast/early* Asp celerative(II)] [*again* Asp repetitive(II)] [*often* Asp frequentative(II)]  
 [*completely* Asp Sg Completive(II)]

2. Quirk et al.(1985) では、手段を表す前置詞としては by(あるいは、by means of) が用いられ、道具を表す前置詞句としては by あるいは with が用いられると述べられている。

ちなみに、同じような前置詞句を用い、手段・道具と類似した概念を表す材料も義務的付加詞として働く。

- (i) The house was built with the traditional materials used by the earliest settlers.  
 (ii) This building was constructed with local limestone and granite.

#### 参考文献

- Cinque, G. (1999) *Adverbs and Functional Heads: A Cross-Linguistic Perspective*. Oxford University Press, New York.
- Dowty, D. (1979). *Word meaning and Montague Grammar*. Reidel, Dordrecht.
- Fagan, S. (1988) "The English Middle," *Linguistic Inquiry* 19, 181-203.
- Fagan, S. (1992) *The syntax and semantics of middle constructions*. Cambridge University Press, Cambridge.

- Greenbaum, S. (1969) *Studies in English Adverbial Usage*. Longman, London.
- Grimshaw J. B. G. and S. Vikner (1993) "Obligatory Adjuncts and the Structure of Events." In Reuland, E. and Abraham, W. (eds.) *Knowledge and Language. Vol. II. Lexical and Conceptual Structure*. Kluwer, Dordrecht. 143-155.
- Jackendoff, R. (1972) *Semantic Interpretation in Generative Grammar*. MIT Press, Cambridge, Mass.
- Klingvall, E. (2003) Aspectual properties of the English middle construction. *Working Papers in Linguistics - Volume Three*. The Department of English in Lund.
- Pesetsky, D. (1995) *Zero syntax: Experiencer and cascades*. MIT Press, Cambridge, Mass.
- Rapoport, T.R. 1999. "The English Middle and Agentivity." *Linguistic Inquiry* 30:147-155
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman, London.
- Zwart, J-W. (1997) "On the Relevance of Aspect for Middle Formation." Ms., University of Groningen.